



九州初出土の銅鐸
吉野ヶ里遺跡
「弥生都市はあったか—幾点
環濠集落の実像—」 展出品

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

20 September 2001

No. 127



展覧会案内

吉野ヶ里歴史公園開園記念

平成13年10月26日(金)~11月25日(日)

弥生都市はあったかー拠点環濠集落の実像ー

はじめに

昭和61年度から実施されている吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、弥生時代のクニの中心と目される環濠集落の全貌を私たちの眼前に示してくれました。それは激しい戦闘を彷彿とさせる厳重な環濠や土壘・樹列・物見櫓、権力者の存在や高度な祭祀を窺わせる集落内の計画的な区割り、大型建物の発見など、従来の牧歌的な弥生農村のイメージを一変させるものでした。

この吉野ヶ里遺跡の発掘成果は考古学研究の世界にも大きな衝撃を与え、弥生時代の拠点環濠集落を単なる「ムラ」ではなく、「都市」として捉え直そうとする「弥生都市論」が今、盛んに論議されています。そこで今回の企画展は、吉野ヶ里をはじめとする全国の代表的環濠集落7遺跡の出土遺物や復元模型などを一堂に集め、当時のクニの「みやこ」である拠点集落の様子がどのようなものであったか、皆さんと一緒に考えていくこうというものです。

「都市」の定義については、洋の東西によって、また歴史学・考古学・地理学・人類学・民俗学・経済学などの学問分野によって、さらに研究者によって、実にさまざまです。参考までに弥生都市論の主な論点を列記すると以下のとおりです。

- ①大規模な集住。
- ②多彩な職種の住民（農民以外の人口が多い）。
- ③食糧や生活必需財の外部依存。
- ④計画的な集落構成・外郭施設・内部区画。
- ⑤首長権の卓越度・集落内部の階層性。
- ⑥政治的・宗教的中枢施設の存在。
- ⑦経済的中核性（市場の存在・広範な交易）

今回の展示では研究史や地域性を考慮し、代表的な7つの環濠集落を選びました。各遺跡の特徴と主な出品資料を紹介しますので、みなさんもぜひ会場で、各遺跡の「都市度」を測ってみて下さい。弥生体験コーナー・ビデオ上映もあります。

I. 環濠集落の典型

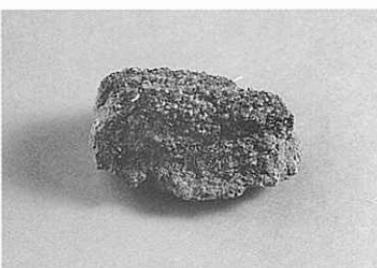
—神奈川県大塚遺跡—

2.2haと決して大規模ではありませんが、1970年代に隣接する墓地と共に発掘され、環濠集落の全貌を知ることができる遺跡として有名になりました。遺跡の形成期間が短く、他の時代の遺跡と重なっていないため、視覚的にも分かりやすいです。この地域は全国でも最も環濠集落が集中しており、拠点集落と周辺集落という研究視点もここから生まれてきました。現在でも拠点集落の人口推定の基準として重要な役割を果たしています。

おもな展示資料としては大塚遺跡及びその墓地である峠勝土遺跡の全体模型や炭化米・弥生土器・各種磨製石斧類・磨製石剣・砥石・磨石などがあります。



環濠集落の全貌 大塚遺跡



炭化米 大塚遺跡

さか も ぎ II. 逆茂木が牙をむく

—愛知県朝日遺跡—

朝日遺跡は愛知県西春日井郡清洲町はか市3町にまたがる広大な弥生時代の集落・墳墓遺跡で、総面積は80haにも及ぶと言われています。弥生前期の環濠集落は1.2haほどですが、中期になりますと、南北2ヶ所の大きな居住域ができ、北の方は7haほどの大型環濠集落と推定されています。この遺跡の特徴はその厳重な防御施設にあり、濠と乱杭や逆茂木と呼ばれるバリケードが幾重にも巡っています。また1辺30mを越える大型方形周溝墓や東海地方唯一の玉作り工房の存在などからも濃尾平野における一大勢力の拠点であったことが窺われます。

展示資料としては、激しい戦闘を窺わせる石槍・石剣・石鎌などの武器や手工業生産の一部門である玉作り関係の遺物、周辺共同体統合の祭器と言われる銅鐸（複製）などが注目されます。



外敵を防ぐ杭列
朝日遺跡



銅鐸 朝日遺跡

III. 多重環濠の拠点集落

—奈良県唐古・鍵遺跡—

奈良盆地中央にある弥生時代を通じての拠点環濠集落です。3~5状の環濠が幅100~150mという環濠帯を形成しており、全体面積は約30ha、内部の居住空間だけでも約16haを測る近畿地方随一大規模環濠集落です。出土遺物が学会に報告されてから今年で100周年を迎ますが、中でも1936・37年に行われた調査では弥生土器研究の基準となる土器が多量に出土した他、木製農具や容器・獸骨・炭化米など弥生文化を総合的に知るための資料が豊富に出土しました。

展示資料では実大の炉跡複製や銅鐸の石製鋳型・土製鋳型外枠・送風管・取瓶など青銅器の鋳造に関わる遺物が何と言っても注目されます。その他、最古級の大型建物の復元模型や柱・柱穴の実大複製・樓閣風の建物を描いた土器片や各種の絵画土器などもこの遺跡の特色を示しています。



大型建物復元模型 唐古・鍵遺跡



木製の匙や容器類 唐古・鍵遺跡

IV. 弥生都市論の試金石

—大阪府池上曾根遺跡—

現在の弥生都市論の直接の火付け役となった遺跡です。弥生前期から中期にかけての拠点環濠集落で、中期の内濠とされる範囲内だけでも8haほどの規模を誇ります。何よりもこの遺跡の評価を高めたのは1994年、遺跡の中央付近から発見された20m×7mほどの巨大な建物です。伊勢神宮に類似した柱の配列や直径2mもあるクスを刳り抜いた井戸を伴うことなどから神殿ではないかと言われています。また環濠の内外には極めて高密度の堅穴住居が見られ、500人から1000人位の人口を抱えていたのではないかと推定されています。

この遺跡の特色を示す展示品としては、石庖丁の製作工程を示す各種未成品、金属器生産に関わる熱変形土器や送風管、重さでは日本最大級のヒスイの勾玉、紀元前52年に伐採されたことがわかった大型建物の柱（複製）などがあります。



復元された大型建物と井戸・立柱 池上曾根遺跡



弥生時代最大級のヒスイ製勾玉 池上曾根遺跡

いまとく V. 一支国の首都

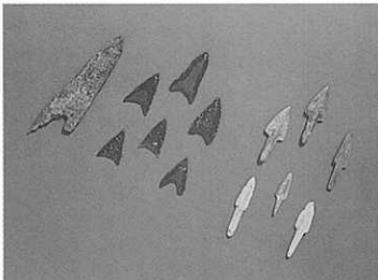
—長崎県原の辻遺跡—

『魏志倭人伝』に登場する国（一支国）のみやこであることがほぼ確かな唯一の遺跡です。弥生中期から後期にかけて3重の環濠に囲まれていて、外濠の内側で約24haほどの面積を誇ります。環濠内の最も高い場所には宗教的施設と推定されている建物群があります。また環濠の外側からは全国で初めて弥生時代の船着き場の跡が発見されました。朝鮮半島と九州本土を結ぶ海上交易を最大の生業にしていたと思われる一支国のみやこにふさわしい遺構です。

展示品ではトンボ玉（複製）や三翼鏡（複製）、戰国式銅剣・中國錢貨・樂浪系土器などの中国系遺物、無文土器や三韓系瓦質土器などの朝鮮系遺物が交易活動や人々の往来を伝えますし、ココヤシ製の笛（複製）やイルカ・アシカの骨も島国ならではのくらしへを偲ばせます。



船着場の復元模型 原の辻遺跡



さまざまな矢じり（鉄鏃・石鏃・銅鏃） 原の辻遺跡

VII. 水辺の多重環濠集落

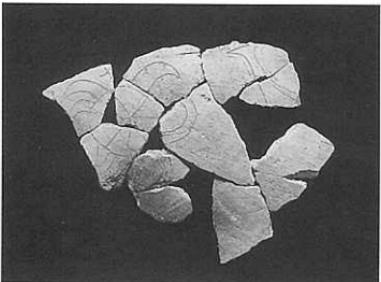
—福岡県平塚川添遺跡—

北部九州で初めて確認された低地性の多重環濠集落で、台地の脇に立地します。隣接して平塚山の上遺跡と呼ばれる環濠集落があり、両者合わせた面積は20haにも及びます。弥生中期から後期にかけて営まれていて、2重から3重以上へと次第に多重化が進んだようです。環濠内には整然と並んだ4棟の掘立柱建物や楼閣とされる大型建物があり、権力者の存在や計画的な集落形成が窺えます。また多重環濠帯の外側に別区と呼ばれる7つの付属区画があり、倉庫群や工房群など機能分担がなされていた可能性もあります。

展示品では有力首長の存在を伝える中国製内行花文鏡片や、北茂安町白壁遺跡から出土した鏡と同じ鋳型で作られた小型倣製鏡、玉作りが行われていたことを示す管玉の未成品や玉砥石などが注目されます。また建築部材や木器類も豊富です。



復元整備された環濠と集落 平塚川添遺跡



巴形銅器を描いた土器 平塚川添遺跡

VII. 巨大環濠と大型建物

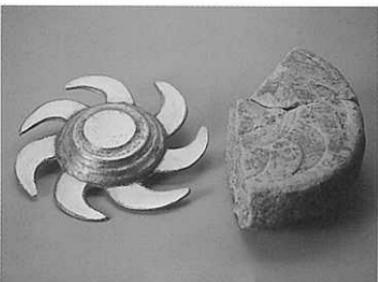
—佐賀県吉野ヶ里遺跡—

我が国において環濠集落が確立する弥生前期初頭から消滅する弥生終末期まで、環濠集落の段階的発展を追うことができる唯一の遺跡。都市的要素としては後期環濠集落の32ha以上の規模と内郭と呼ばれる二重構造が特に注目されます。内郭が複数ある点については、集落の中核部がさらに機能分化している可能性もあります。また北内郭の弥生時代最大の建物や巨大倉庫群の存在も地域社会における中枢機能を如実に示しています。

展示資料としては埴丘墓出土のガラス管玉・銅剣類・青銅器鋳造関係遺物・銅鐸・銅戈・鐸形土製品・中国錢貨・銅鏡片・鉄製農工具類・木製農工具・鉄製武器類・祭祀用や外来系の土器群・復元された弥生の衣装類・遺跡全景模型・北内郭復元模型・環濠土層断面パネルなどがあり、これまでの成果を一堂に見ることができます。



復元された大型建物 吉野ヶ里遺跡



巴形銅器の鋳型と復元製品 吉野ヶ里遺跡

エッセイ

こどものための博物館・美術館 —3年間の試行錯誤—

わたしたちの館、佐賀県立博物館・美術館は、総合博物館として発足した昭和45年以来、自然史・考古・歴史・美術工芸・民俗とそれぞれの部門ごとに研究・調査を進め、その成果を発表する企画展や館蔵資料の紹介をする常設展を、もっぱら一般成人を対象に開催してきました。

小中学生の授業のために積極的に利用していくために、平成10年（1998）、博物館常設展「佐賀県の歴史と文化」見学のための小学生用ワークシートが完成しました。ゲーム感覚で質問のこたえ探しをするというワークシートを道案内に、ガイダンス役のわたしはなんどかこどもたちと館内をまわってみたのですが、まず説明に窮したのは、わたしたちが知識として理解している歴史という時間の概念でした。わずか十数年の時を生きているこどもたちにとって、50年という祖父母の年齢さえ想像の外、しかし「明治時代はいつ？」かはわからなくなても恐竜の生きた時代は鮮明にとらえられるという超現実的な感覚には驚かされます。

また、作品や資料を前に話す時は、ことば選びに四苦八苦の連続でした。低学年のこどもたちが説明のことばに応えてくれて安堵する、こんな経験からめったにない刺激を受けたのも事実です。

こんなこどもたちのために、時もジャンルも超えたおもしろい展覧会をしてみたい、博物館と美術館の所蔵品をいっしょに見てもらえる展示にしたい、などと欲張った構想で「美術館は動物園!!!」を開催したのは翌平成11年（1999）でした。



「美術館は動物園!!!」展示風景

以前から九州各県の博物館や美術館が、夏休み期間に「こども美術館」あるいは「こどもミュージアム」を実施していて、機会があれば挑戦してみたいテーマだったこと、ふつう美術館常設展の展示構成は絵画が中心のため作品選びに少々マンネリズムを感じていたこと、観賞の邪魔をしない程度に作品の展示を遊んでみたかったことなど、純粹に「こどものため」ばかりではない要素もいくらかあったのは確かです。

はじめにも述べたとおり、わたしたちの館の特色は、博物館と美術館が実質的に一つであることです。多少の冒険はいとわず、動物を主題に思いつくものをなんでも各部門の学芸員に選んでもらい、美術館の2部屋を動物園に見立ててみました。古美術中心の部屋には長沢蘆雪の「獅子図」あり、武者鏡の動物たちが天井からにらみをきかせ、次の絵画や彫刻の部屋には、カチガラスの大きな巣にたたずむオオハゲコウの彫刻が不思議そうにダチョウの卵を見つめているといういたずらもやっています。

作品の短い説明を中心とした作品表示は、わずか数行の解説文のために数冊の辞書でことばを確かめながらの作業となり、あらためて平明な表現の難しさに気を引き締めることになりました。通常の作家名・作品名・制作年（年代）はあとまわし、おとなにはうるさがられたようですが基本的にひらがなを多く、やさしい漢字にもルビをふり、文字も大きくしました。

小学校に企画展のご案内に行くと、「低学年でもわかりますか？」と念をおされることが多いが、今回の「美術館は動物園!!!」は自信をもって返事ができました。

この展覧会は、常設特別展としていますがおとも無料です。ただ、より多くのこどもたちに観てもらうには、絶対多数の小中学校が博物館・美術館に来るために、なんらかの交通手段を必要とする現状を今後は解決する必要があるでしょう。

「美術館はひとがいっぱい!!!」を開催したのは平成12年（2000）でした。美術館だけでは人物像や画家の自画像に彫刻を加える展示で終わっていたでしょうが、考古部門からは人物頭部、美術や歴史部門からは「涅槃図」や「参勤交代図」、九州陶磁文化館からは磁器の人形など多種多彩な内容が盛りだくさんながら、身近な「ひと」というテーマでわかりやすかったため楽しい展示になりました。今回のいたずらは、額縁に鏡を入れて「あなたの自画像」を映したことでしょうか。

壁面を展示しないまま残しておき、小中学生を対象に「自画像をかこう！」というイベントを開きました。毎年おこなうデッサン教室とはちがつて、今回初めて展示室内で絵を描いてもらうという講座です。鏡と画用紙と画板に、展示室内のため事故があつてはと鉛筆と消しゴムを準備して、日時を限つての講座でした。描いた絵は、自分であいた壁面に展示しましょうと、脚立も準備して、あすこだこだと勝手気まま、少し曲がっても楽しい展示のできあがりです。講座終了後も、「描きたいひとはご自由に」と画用紙と鉛筆、画板を受け付けから貸出していたら、展示壁が埋め尽くされてしましましたが、教務主任研修の先生がたのサポートもあり無事に終了しました。

こども美術館の準備期間中は例年あわただしくひとの出入りが多いのですが、前年は学芸員実習生に展示レイアウトのアイディアを出してもらい、この年は「涅槃図」の人（なかにはヒンズー教の土着の神らしきもの）や動物を数えてもらう、作品解説を作成するなど、実習をかねた協力がこども美術館を支えているのです。

ちなみに、今年は講座時間外に、岡田三郎助の「富士山」と副島種臣の「宏済閣」をもぞう紙に実物大に鉛筆でトレースしてもらい、「おおきい」がどのくらいか、さわれる展示にしてみました。

テーマ選びも三度までか「美術館でさがそ！おおきい・ちいさい」（平成13年）は、漠然としたイメージが作品や資料の形になるのに難航、前述

の作品に加えて谷文晁の楳絵「山水図」（寄託）や中林梧竹の屏風「虹図」（寄託）などを選び、描かれた主題ごとに、たとえば富士山なら油彩画、水墨画、書などをまとめて並べた展示は、いまひとつこなれていなかったかと反省しています。

展示期間が7月6日（金）から8月26日（日）までと長く、この間美術館展示室が空室という偶然のチャンスを利用して、8月14日（火）から19日（日）まで、こども美術館ワークショップ「おおきな絵をかこう」を試みました。個展やグループ展が開かれる366.5m²の空間の床にはブルーのシートを広げ、準備したのはもぞう紙、画用紙（四つ切り・半切）、色画用紙、ポスターカラー、クレパスやクレヨン、絵筆など。特に指導をするわけではないのでワークショップというよりフリースクールです。約束の「楽しくかくこと」と「さわがないこと」さえ守ればなにをかいても自由なので、みんな1枚ではもの足りず、2枚3枚と楽しんでいました。

最初に準備したもぞう紙50枚、ポスターカラーは2日で底をつき、絵を壁に止めるピンがなくなり、金曜日にはなんと壁が不足という大盛況に驚き、二度三度と連れてきて下さる保護者の方々の熱心さに脱帽、延べ約240人のこどもアーチストが参加したワークショップは無事に終りました。

最終日に作品を取りにきた家族は、絵の前で記念撮影を楽しみ、スタッフは壁の空間をさびしくながめながらもほっと一息の最終日でした。

（学芸課専門員 宮原 香苗）



「自画像をかこう！」参加者の作品の展示

平成13年度佐賀県立博物館企画展

吉野ヶ里歴史公園開園記念 弥生都市はあったか —拠点環濠集落の実像— 展

主 催：佐賀県教育委員会・佐賀県立博物館・財自治総合センター

後 援：国営吉野ヶ里歴史公園工事事務所

会 期：平成13年10月26日(金)～11月25日(日) 会期中無休

会 場：美術館2・3・4号展示室

観覧料：大人620(510)円・大学生300(200)円 ※()は20名以上の団体料金

高校生以下無料

記念講演会

11/3(土) 14:00～ 「世界の中の弥生文化—都市の成立をめぐって—」

大阪府立弥生文化博物館長 金闇 惇氏

11/10(土) 14:00～ 「弥生都市論を展望する」

佐賀県立博物館 蒲原 宏行

11/17(土) 14:00～ 「吉野ヶ里は弥生都市か」

佐賀県文化課 七田 忠昭

ワークショップ

11/10(土)・11(日) 10:00～16:00 「弥生のオシャレ工房」 (於博物館屋外展示場)

日 誌

■平成13年度博物館実習

期間：6/25㈪～7/6(金)

実習生：20名

■教職員研修の受け入れ

期間：7/24㈬～8/29㈫

研修生：13名



博物館実習



ワークショップ「大きな絵を描こう」

■夏休みこどもミュージアム から

「親と子の竹細工教室」(7/27～7/30)

参加者：小学生と保護者28名

「こども何でも相談室」(7/27～7/29, 8/21～8/22)

参加者：小・中学生16名

「昆虫・植物標本作製教室」(7/31～8/2)

参加者：小学生と保護者20名

「こども学芸員」(8/7～8/10)

参加者：中学生13名

ワークショップ「大きな絵を描こう」(8/14～8/19)

参加者：幼児と保護者、小・中学生473名

佐賀県立博物館・美術館報 第127号

平成13年9月20日

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

TEL0952-24-3947 FAX0952-25-7006

印刷 みどりプリント社